大渕遺跡に見る中世集落の一形態

池　本　正　明

1

大渕遺跡は、海部郡甚目寺町に所在する、弥生時代～室町時代にかけての複合遺跡で、現在、大きく4期に区分（大渕Ⅰ～Ⅳ期）して考えている。その概要は、前掲の「大渕遺跡」に譲ることとして、ここでは今年度検出された中世建物群（大渕Ⅵ－1期）を問題とする。

今回検出された建物群は12棟で、二群に分かれて分布しており、愛知県下における中世建物を理解する上での好例の一つとなった。本項目のテーマは、これら建物群の考察である。

2

大渕Ⅳ－1期は、前掲「大渕遺跡」に記されているように、13世紀を中心として考えている。前述のように、検出された建物群は総数12棟で、6棟ずつのまとまりを持ち、一定の距離を保ち分布している。一群中の形態は、中央に狭い空間を有しながら、その外縁をとり囲むような配置で、かなり強い有機的な関連が想定できる。従って、これらの建物群を「屋敷(1)」として認定する。

それぞれの屋敷は、主屋・倉・井戸の組み合わせを基本形態とし、それに数棟の納屋的建物を加えて構成される。個々の建物は、方位に規制を受けてはいるものの、長短不揃いである場合や、柱通りが悪い場合もあり、厳密な規格性は持たない。なお、建て替えは北側の屋敷について、主屋と倉について各1回認められるのみである。

次に、屋敷に関連すると思われる出土遺物を、供膳具・煮沸具・貯蔵具と区分し、概観してみたい。まず、供膳具は、いわゆる山茶椀・小皿を基本的な組み合わせとし、若干の土師器皿がこれに加わる。煮沸具は全て、土師器鍋・釜で占められており、貯蔵具は、いわゆる無釉焼き締め陶にほぼ限定される状況である。これを全体的に見れば、供膳具が最も多く、煮沸具・貯蔵具は、わずかに含まれるにすぎない。

これらの遺物と、建物の建て替え状況から判断すると、この屋敷の年代を13世紀中頃に考えることができようか。

3

以上が、大渕遺跡における屋敷の概要である。これらは、それぞれが東西36m、南北60mの溝による方格地割り中に占地している。地割り溝は、縦方向がほぼ南北を向き、しかもB溝については条里の境界上に所在する(2)のに対し、横方向は縦方向に直角で交差することはなく、全体的にはひしゃげた長方形を呈している。

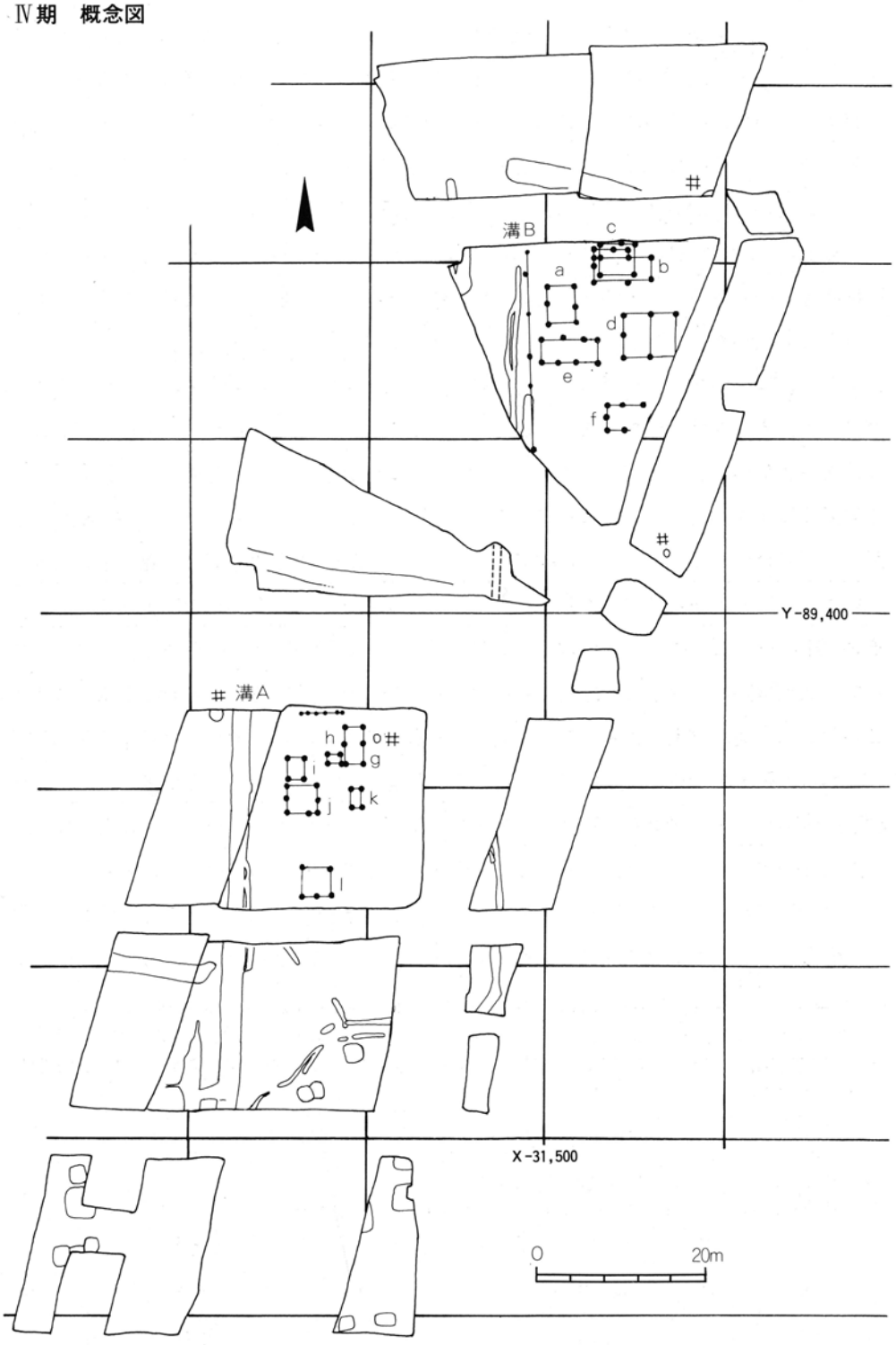
この状況は、土田遺跡・朝日西遺跡・阿弥陀寺遺跡(3)・森南遺跡(4)などで検出されている状況と若干の違いは認められるものの、方格を成すという点では一致する。従って、この様相を、当地域における中世集落の一般的な形態として理解しても良いだろう。次に、こうした方格地割りの掘削時期の上限を、大渕遺跡内で推定してみたい。

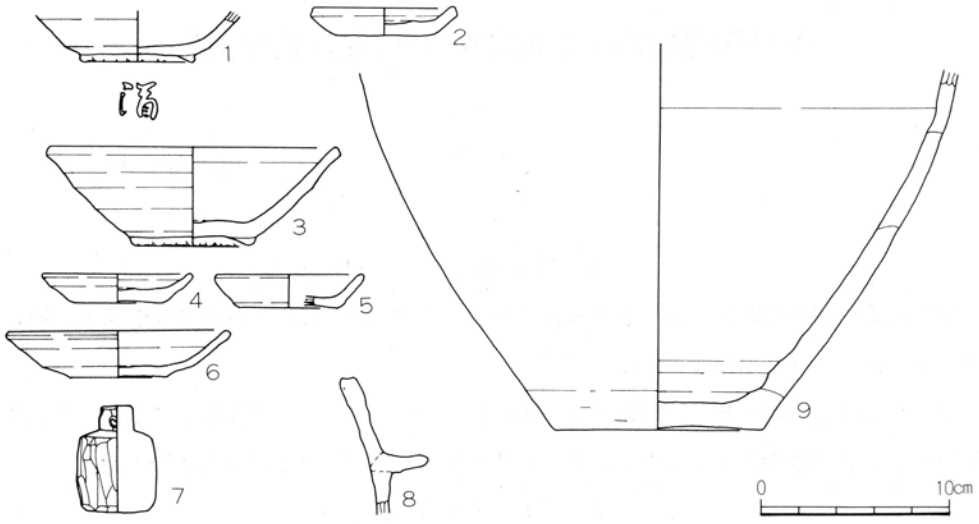
大渕Ⅲ期は、前掲「大渕遺跡」に述べられているように、平安時代を中心とする時期であり、現段階で26棟の建物が検出されている。これらは、前述したⅣ－1期の状況と同様に、ある程度のまとまりを持った展開を示してはいるが、相互に厳密な境界を有さず、ごく簡単な柵が数列認められるのみである。また、60E区では、溝AとⅢ－3期に属する井戸とが切り合い関係を持ち、現在検出している方格地割りの上限を規定することができる。

以上の事実関係から、方格地割りは、Ⅲ期に属する建物群とは同時存在は考えられず、その掘削時期はⅣ－1期で、屋敷とはあまり前後しない段階が考えられるものである。従って、大渕遺跡における方格地割り施行の上限を13世紀代に考えることができる。なお、この動きは、前述の土田遺跡・朝日西遺跡・阿弥陀寺遺跡・森南遺跡などの中世集落遺跡と、真宮遺跡・生平遺跡(5)などの平安時代の集落遺跡でも確認することができるため、大渕遺跡のみに見られる特殊性ではない。また、通常、平安時代に求められる集落の画期(6)（消滅と発生）も、大渕遺跡のこうした動きと密接な関係を持っていると思われる。従って、以上の点から、当地域における方格地割りの施行を13世紀に求めることができ、それは、中世における集落再編成の結果として出現したと理解できるのではないかと思われる。

名　称	規　格	面　積	備　考	名　称	規　格	面　積	備　考
a	1×2	19.1㎡	主屋①	g	1×2	12.5㎡	主　屋？
b	1×2	28.1㎡	主屋②	h	1×1	2.5㎡	
c	2×2	19.2㎡	倉　①	i	1×1	7.2㎡	
d	2×2	41.0㎡	倉　②	j	2×2	15.5㎡	倉
e	1×3	25.5㎡		k	1×1	3.9㎡	
f	2×2カ	17.0㎡		l	2×1	16.8㎡	倉

Ⅳ期　概念図





No	名　称	出土地点	備　考	No	名　称	出土地点	備　考
1	北部系山茶碗	60B₁区・SE02	墨書	6	土師器皿	60F区・SE01	ロクロ使用
2	南部系小皿	60B₁区・SE02		7	陶　錘	60F区・SK19	
3	南部系山茶碗	60F区・SE01		8	羽　釜	60F区・P．56	
4	南部系小皿	60F区・SE01		9	壺	60F区・SK24	
5	土師器皿	60F区・SE01	ロクロ使用				

〔注〕

(1)　石野博信「日本古代の住居と屋敷」『日本のすまいの原流』文化出版局1984）133頁

(2)　浅井和宏氏の推定データによる。

(3)　「土田遺跡Ⅱ」・「朝日西遺跡Ⅱ」・「阿弥陀寺遺跡Ⅲ」（『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』愛知県教育サービスセンター1985）

(4)　安藤義弘氏御教示による。

(5)　荒井信貴氏御教示による。

(6)　鬼頭清明『古代の村』（岩波書店1985）88頁

(7)　金田章裕「中世の村落」（『考古地理学４村落と開発』学生社1985）